〔廻國雜記〕なか田といへる所にて、はじめてふじをながめて、

言のはの道も及はぬふじのねをいかで都の人に語らん夕あけぼのに、ながめのかはれることを、

俤のかはるふじのね時しらぬ山とは誰かいふべあけぼの、かの嶽は、遠く行に隨ひて、空にも及ぶ計に侍ければ、

遠ざかりゆけばま近く見えて鳧外山を空に登るふじのね

〔士峯錄一倭歌〕道春駿河の國に侍し時、妙壽院藤歛夫のもとに文つかはすついでに、よみてたてまつれる歌、

いく千代といはふ心をするがなるふじのくすりをもとめまくほし

藤歛夫のかへし

ありてうき身のさがなさにおもふかなふじのくすりもやきすてし世を

ふじの雪におもひもいでよ見そめてし二十あまりの山の端の月

なれよ富士雲の上までいやたかき名のまことをもしかれとぞおもふ

〔泊洒筆話〕一不二の高嶺は、わが國のしづめともいひつたへて、こと山にすぐれたる事は、いひ出でんも今さらなることなりや、此山をよめる古歌、萬葉集よりはじめて、世々の勅撰私集に入りたる名歌ども、あげてかぞへつくしがたし、いにしへは置きていはじ、ちかく水無瀨中納言殿氏成卿の富士百首といふものあり、世にしる人なし、近き比もとめえたるに、よき歌ども多し、その一二をいはゞ、

ふじのねやのどかにわたる春風もたゞ世のなかのあらしなるらん

うつしゑの筆かぎりある不二のねをかぎりもあらぬ雲井にぞ見る